

子どものメンタルヘルスにおける養護教諭の役割・専門性に関する研究動向

—学校保健分野を中心に—

小 貫 衣 澄*
庄 司 一 子**

はじめに

近年我が国において、子どものメンタルヘルスに関する問題が顕著になってきている。平成23年度の日本学校保健会による大規模な全国調査では、保健室利用者のうち記録を必要とする子どもに見られる健康問題の主な背景要因として、「主に身体に関する問題」は小学校29.0%、中学校45.2%、高等学校42.4%であるのに対し、「主に心に関する問題」が小学校39.0%、中学校45.2%、高等学校42.4%と身体に関する問題を上回っており、学校保健においてもメンタルヘルスの問題が深刻化していることがわかる。

また、そのような子どもたちの現状に付随するように養護教諭の役割や専門性にも変化が生じてきている。従来、養護教諭というと、身体の問題に関する役割が多かったが、1990年の保健体育審議会答申において、養護教諭の新たな役割として、ヘルスカウンセリング（健康相談活動）を挙げ、「養護教諭は児童生徒の身体的不調の背景に、いじめなどの心の健康問題がかかわっていること等のサインにいち早く気付くことのできる立場にある」といわれている。さらに文部科学省（2017）によって「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～」という参考資料が作成され、その中で子どものメンタルヘルスに関する養護教諭の役割について強調されている。

以上のように子どものメンタルヘルスに関する養護教諭の役割や専門性について言及されるようになってきている。そこで、本研究では、子どものメンタルヘルスと養護教諭に関連する先行研究はどのようなものがあるか、文献レビューを行うことにより、その動向について概観し、子どものメンタルヘルスに関する養護教諭の役割や専門性について考えることを目的とする。

論文の検索方法

2018年12月4日にWeb版医学中央雑誌およびCiNiiにおいて、「養護教諭」と「メンタルヘルス」、「養護教諭」と「精神保健」、「養護教諭」と「心の健康」をそれぞれキーワードとし、原著論文を絞り込み条件として検索した。その結果を統合した上で重複した論文を削除した。さらに子どものメンタルヘルスに関する内容でないもの、養護教諭についての言及がないものは除外し、主として子どものメンタルヘルスに関する養護教諭の役割や専門性について述べられている論文を最終的な文献とした。なお、養護教諭とメンタルヘルスがキーワードであることから、本研究における「子ども」は、学校段階にある小学生から高校生までとした。

先行研究

医中誌およびCiNiiで「養護教諭」と「メンタルヘルス」をキーワードとして検索した結果64件、「養護教諭」と「精神保健」では74件、

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程

** 筑波大学人間系

「養護教諭」と「心の健康」では 57 件が関連論文として検索された。重複を除いた結果、81 件となった。さらに方法に記載したような厳選を行い、46 件を最終的な関連論文とした。

抽出された子どものメンタルヘルスに関する養護教諭の論文 46 件は、大きく分けて「養護教諭を対象にした研究」15 件、「子どもや管理職からみた養護教諭に関する研究」4 件、「養護教諭の実践研究」5 件、「養護教諭を対象とした実践研究」7 件、「特定の子どものメンタルヘルスの問題と養護教諭に関する研究」16 件（うち 1 件は「養護教諭を対象とした実践研究」と重複）に分けられた。以下、詳細に概観していく。

1. 養護教諭を対象にした研究

養護教諭を対象とした子どものメンタルヘルスの論文は 15 件抽出された。

米田・林・吉村・高石・久田・宮里（1987）は養護教諭、民生委員、地区医師に地域思春期保健システムの可能性について調査を行っているが、その中で教育評価といった不安要素の少ない養護教諭は問題把握と対応における適任者であると述べている。また山城・久田・金子・杉本・荒田（1988）は精神衛生研修会に出席した小・中・高等学校の養護教諭 501 名の質問紙調査から、養護教諭のあるべき姿として体と心の健康に同じ位関心を払う必要があると考えている者が大半であり、同時にカウンセラー的役割ができていと報告している。さらに、崎山・飯田・岩坂・平尾・畑・岸本（2000）は、教職員への児童思春期精神科医療に対する意識調査を行っており、養護教諭で精神科に紹介相談をした経験がある者は 56.7%で他の教師(14.5%)より多く、養護教諭が精神科との連携において重要な役割を果たしていることがわかる。

養護教諭が対応した 100 事例の分析を行った堀籠・多田・吉田・遠藤（2004）は、中学生のメンタルヘルスに対する養護教諭の対応と役割について検討した。その結果「何かありそうだ」と気づく養護教諭の対応は精神保健を進める上で重要であるとし、具体化している主訴の背後に別のニーズがあることも視野に入れ、対応す

る必要があるとしている。また、保健医学的基盤を持った教育保健、教育職員としての力量の充実を図ることを主張している。

また、遠藤・三木・平川・鈴木・大沼・久保田・力丸（2007）は養護教諭が子どもたちの訴えや現象に対応するための養護診断とはどのようなものかについて検討を行っているが、「子どものニーズを捉える」ということが養護診断の独自性であり、専門性であると述べている。

日下・廣部（2007）は 20 名の小・中学校の養護教諭に調査を行い、メンタルヘルスの問題に悩む生徒にどのような実践を行っているのかについて報告している。養護教諭は児童生徒との普段からの関わりを大切にしており、保健室をオープンにし、アンテナを高く張って、一人一人の子どもにメッセージを送り続ける存在であると述べている。

石崎・中村・伊豆・栗林・大森・佐藤・西山（2010）は小学校に 20 年以上勤務している現職養護教諭に半構造化面接を行い、心の健康問題を持つ子どものサインと養護診断及び対応についての検討を行っている。養護教諭は体温を計るという行為中にアセスメントしており、何気ない会話を通して関係性の構築を行い、いつでもあなたを見ているという気持ちを伝えていたと報告している。

甘佐・長江・土田・山下（2011）は中学校養護教諭を対象に精神疾患が疑われる生徒への対応の現状について調査を行った。その結果、問題行動を持つ生徒に対する養護教諭の役割として、「生徒への直接的な介入」「避難場所としての保健室の確保」「他の教員との連絡・連携」「他職種への相談」「保護者への連絡・相談」の 5 つが抽出された。また、ここでは他の教員との連携についても言及されており、養護教諭が早期介入の必要性を感じていても単独では動けず、サブ的な位置付けで動くことを余儀なくされること、一般教員の知識不足により対応が困難になることを挙げている。保健室・養護教諭への無理解や何を期待しているかということは、養護教諭という専門職のアイデンティティに関わる問題であるとも述べている。

中村・塚原・伊豆・栗林・大森・佐藤・渡邊・石崎・西山（2013）は養護教諭がどのように子どものサインを受けとり、診断や対応を行っているのかについて検討している。ここでは専門性に基づく役割として、臨床心理学的な着眼点や保健室の様子を伝えること、子どもの健康問題の専門家、教師としての役割、コーディネーターとしての役割が挙げられていた。また、佐藤・中村・塚原・伊豆・栗林・大森・渡邊・石崎・西山（2013）は子どもの心の健康問題における外部の関係機関や専門家との連携について養護教諭に調査を行ったところ、経験年数5年を境に連携したことがあると回答したものが多くなっており、外部機関との連携で養護教諭が直接関わったのは8割以上で、外部機関との連携の重要な役割を担っていると報告している。

また、子どもの心の健康問題の養護診断・対応に関して、所有免許による相違について検討している研究も存在する（栗林・中村・塚原・伊豆・大森・佐藤・渡邊・石崎・西山，2014）。質問紙調査によって、602名の養護教諭を分析対象として検討を行っている。結果として、看護師免許と教員免許をもっている養護教諭、看護師免許をもっている養護教諭の順で養護教諭の「専門性」が高く、看護師免許ありと教員免許ありの2群を比較したところ、「専門性」、他の教職員との健康問題の「捉え方の違い」を感じることは看護師免許ありの方が高かったと報告している。そのことから、「専門性」が高いと「捉え方の違い」も高くなり、担任などの他の教職員との健康問題の捉え方に違いを感じるのではないかと推察している。またここでも養護教諭の「連携」に関する役割の重要性が指摘されていた。

異儀田・小山・嵐・犬塚・田中・犬飼・遠藤・小川・日沼・山元・落合・松寄（2015）は中学校に勤務する養護教諭が捉える子どものメンタルヘルスの問題のサインと技術について検討を行っている。そこでは「情報共有」をはじめとして、スクールカウンセラーへの「橋渡し」、教職員・家族のサポート、適切な役割分担といった「自分の役割の明確化」、心理専門職への相

談、「ケースマネジメント」といったような「連携」に関する役割があると述べられている。特に、「教職員・家族のサポート」の役割においては、近年の生徒の心の健康問題の増加や多様化に伴い、今後も期待される役割であるとしている。

富樫（2017）は公立の小・中・高等学校に勤務する養護教諭5名に子どものメンタルヘルスにおける養護教諭の役割と専門性について半構造化面接を行った。その結果、養護教諭の役割は「適切なアセスメントを行い、見通しを立てる」「専門性を自覚し、主体性を持って適切に対応する」「コーディネーターの役割を果たし、学校を動かす力となる」が抽出されている。また、専門性については「学校内外との連携を推進するマネジメント、コーディネート」「学校内での役割の明確化と信頼関係の構築」「学内システムの構築」「専門性を高める自己研鑽」の4つが示唆されたと報告している。

今野・佐藤・高谷・田名部・青木（2018）は精神的問題を抱える中・高等学校の生徒への関わりについて養護教諭へのインタビュー調査を行っている。そこでは養護教諭は学校外の関係者とのやり取りも多く実施し、葛藤を抱えつつ、担任や他の職員との協力体制をとって、生徒への支援を行っており、コーディネーターの役割が期待されていると述べられている。さらにそのような多様な役割を果たしている養護教諭自身への支援体制も課題であるとしている。また、増本・笠置（2017）は精神不調のある高校生に対する養護教諭の支援の現状と課題について高等学校の養護教諭に調査を行っており、養護教諭は個別支援と支援組織づくりを行っていたと報告されている。

養護教諭を対象とした研究としては以上のような研究があげられる。具体的には学校内や外部機関、専門家との連携（コーディネーター）を主とし、子どもの状態の観察・把握、子どもの居場所をつくることといった子どものメンタルヘルスに関する養護教諭の役割や専門性がいわれていた。

2. 子どもや管理職からみた養護教諭に関する研究

養護教諭だけではなく、生徒や管理職から見て養護教諭がどのような役割や存在かという視点から検討されている論文が4件抽出された。生徒を対象とした論文は3件、管理職を対象とした論文は1件であった。

篁・稲光・福田・吉岡（2008）は保健室に対する養護教諭へのインタビューと中学生への意識調査により、両者からの検討を行っている。そこで中学生が考える養護教諭の理想の対応は「話を聞いてくれる」であり、養護教諭もまた「傾聴する」ことを心がけていると回答していた。一方で保健室を相談できる場とは意識していない生徒が多く、生徒は自分が養護教諭に相談していると捉えていないことから養護教諭を意識的に相談者として認知していないのではなかと述べている。

また梶原・永田・田中・宮里（2005）は夜間定時制高校の保健室を活用している生徒たちに対する養護教諭の対応と役割について報告している。ここでは相互に育ちあえる環境づくり、心と体・家族の健康相談役、キャリア支援があげられている。また全日制と異なり、夜間定時制では保健室における居場所づくり、そこでの見守りや声かけを行うといった「相互に育ちあえる環境づくり」の対応が中心であったとその特徴を述べている。

櫻井・青木（2005）も中学生を対象として保健室への認識について調査を行っている。ここでは主に保健室に焦点が当てられているが、養護教諭は保健室にいることから同様に捉えれば、生徒の約半数は潜在的に心理的サポート源として認識していると推測されると報告している。

さらに安林（2012）は学校管理職へのインタビュー調査をし、養護教諭の役割について検討している。ここでは子どもの心のケアという役割を有する職員として、養護教諭には「人間性」が強く求められており、かつては身体的ケアの能力だけを有すればよかった養護教諭が、社会や子どもの変化によって、心のケアの能力を有する必要性が生まれてきたと報告されている。

さらに養護教諭は子どもの背景にあるものをつかめる立場にいて、さらに養護教諭の役割は現場の子どもを介して、学級担任と対比的に構築されていったものであると述べている。

以上のように子どもや管理職の立場や他の視点から子どものメンタルヘルスにおける養護教諭の役割や専門性が検討されている。その結果として、子どもたちの相談相手や保健室を子どもたちがより良い学校生活を送るための環境づくり、従来のような身体のみではなく心のケアもできることが養護教諭に期待されていた。

3. 子どものメンタルヘルスに関する養護教諭の実践研究

養護教諭自身の実践に関する論文として5件抽出された。

佐々木・藤原（2017）は東日本大震災被災地において養護教諭が関わる保健教育の視点を取り入れたストレスマネジメント教育プログラムを実施し、その効果を検証している。そこで心と体の専門的知識を備えた養護教諭が関わることにより、体験による心身の細かな変化に気づかせることができたことと示唆している。児童の実態を把握した学級担任とともに養護教諭がストレスマネジメント教育を担うことの意義は大きいと述べている。

また、真志田・佳村・岩田・横治・中島・尾形・正徳・森川（2014）は中学校において「相談をする」ことへの抵抗感を下げることが目的とし、養護教諭による精神保健授業を行ったことを報告している。岡崎・安藤（2011）も心の健康教育プログラムを作成し、養護教諭による授業の試みについて報告している。ここでは、心の健康教育によって生じた自己理解や他者理解への気づきやストレス状態に関して、個別にフォローアップを行うことは、子ども達の心身の健康づくりを担う養護教諭の重要な役割であると主張されている。

また、秋山（2007）は3年間の取り組みを整理し、養護教諭の立場からスクールカウンセラー（以下 SC）制度活用の在り方について検討をしている。そこでは、「SCの相談体制づくり」

「教員、子ども、保護者への周知」「窓口教員」「連絡調整係」「面談を勧める」などが挙げられていた。また、養護教諭を含めた事例検討を行うことで保健室登校の提案ができたとして述べている。養護教諭の間接的な援助者としての立場から、心理的な重症度よりも生徒に SC との面談の受け入れ態勢があるかどうかを重要と述べ、養護教諭の役割遂行の上でのポイントを述べている。この間接的な援助者としての役割は養護教諭の特徴的な役割であり、専門性ではないだろうか。

Takata (2002) は精神的健康問題を抱える子どもたちに対する保健室での時間制限のないコラージュ療法の有効性について検討を行っている。養護教諭は成績の評価をしないため、子どもは安心することができ、子どもは養護教諭が自分たちに興味を持ち、受け入れてもらっていると感じられると述べている。保健室で時間をかけてコラージュ療法を行うと精神的健康問題からの回復が促進されることから、時間をかけてじっくりと行うことが重要であるとしている。

以上のように養護教諭による保健の授業や SC との連携、またコラージュ療法の実践が行われていた。保健の専門家であることや教室とは異なり、個別に時間をかけて子どもと関わることができる保健室という環境にいること、SC と教員との中間に位置づくような立場にいることは養護教諭の独自性であり、役割や専門性を考える際に重要であるといえよう。

4. 子どものメンタルヘルスに関する養護教諭を対象とした実践研究

養護教諭への実践に関する論文は 7 件抽出された。

まず、北川・佐々木 (2016) はタブレット端末による思春期児童生徒の精神保健アセスメントの試みについて養護教諭と小・中学生に模擬実施を行っている。そこでは標準化された共通の指標を用いることで児童生徒の評価とそれに基づく対応の学校差を減らすことができると養護教諭から感想があったと報告している。評価実施者である養護教諭の知識や経験の違いによ

る評価バイアスがある程度回避できるとしている。

また、岡村・小林・森田・野中・蜂巢・張・増尾・工藤・森 (2010) は養護教諭に対して講演会による過敏性腸症候群の最新の知見と正しい知識や教育・支援方法を学習する機会を提供した。我妻 (2004) は神経質症者を対象にして効果を発揮している森田理論の保健指導への可能性を検討するため、養護教諭に対して森田理論の学習の機会を提供している。さらに小塩・芦川・道上・大沼・種市・布山・東郷・佐々木 (2016) は養護教諭をはじめとした学校教員向けメンタルヘルスリテラシー教育プログラムを行っている。

熊谷・山中・藤生・仲田・杉原 (2000) は教育相談施設と学校との連携について子どものメンタルヘルスのためのサポート実践を行い、その中で養護教諭は連携の窓口の役割を果たしていたと報告している。しかしながら一方で窓口役はその学校における在職期間が長い養護教諭が関係した場合以外は、一般的に養護教諭のみでは限界がある印象を受けたと述べている。また個々の子どもたちの相談援助は、クラス担任教師から養護教諭を通じ、相談員に持ち込まれることが多く、養護教諭は子どもと相談員との連絡の橋渡し役を担ったり、学校の中で子どもに対するクラス外での直接対応を行ったり、重要な役割を担ったとされている。

一方、精神障害の普及啓発活動の評価を検討するため、同一研究者により 2 つの実践が報告されている。保坂 (2011a) はまず、小・中学校の養護教諭への精神障害の講演を行っている。その事前事後の質問紙調査により統合失調症は治る（社会復帰できる）と思っている養護教諭は講演前から 60%以上であったと報告している。一方で統合失調症の陽性症状や陰性症状について知っていたのは 30%台であり、さらに統合失調症やうつ病に比べて神経症やアルコール依存、パニック障害が精神障害に含まれていると捉える割合は低く、早期発見のためにも養護教諭へのさらなる普及啓発が必要であるとしている。さらに保坂 (2011b) は、中・高等学校

の養護教諭に講義とロールプレイを実践した中で、講習会前の統合失調症に関する認知度は養護教諭が78%であり、介護関係者や保健師、一般企業、高校生に比べて養護教諭が最も高かったとしている。このことから養護教諭はもともとメンタルヘルスに対する理解もあり、子どものメンタルヘルスへの実践の理解が得やすく、専門性が高いと考えられる。

以上のように養護教諭に対し、子どものメンタルヘルスに関するアセスメントや教育プログラム、連携へのサポート、講演やロールプレイによる専門的知識の提供といった取り組みがなされており、学校内部のみならず、外部からも子どものメンタルヘルスに関する養護教諭の役割や専門性が期待されているといえる。

5. 特定の子どものメンタルヘルスの問題と養護教諭に関する研究

特定の子どものメンタルヘルスの問題に関する論文は全部で16件抽出された(1件重複)。内容としては「自傷」「摂食障害」「虐待」「不登校」「発達障害」「抜毛癖」「薬物問題」「過敏性腸症候群」「モラル・ハラスメント」「震災時の心のケア」に関するものである。

自傷に関する研究は2件抽出された。毛利・加藤・松本(2016)は小・中・高等学校の養護教諭にインタビューを行っており、そこでは養護教諭は一人で抱え込まずに学校全体として取り組む必要があり、連携の中核となってコーディネートする養護教諭の役割は重要であると述べている。

松本・今村・勝又(2009)は研修会に参加した養護教諭808名の質問紙調査より養護教諭の抱える困難についての検討を行っている。ここでは、連携に関する困難感が示されたほか、自傷行為に対し、83.6%が「周囲の関心を引こうとしている」と回答し、「自殺に関連する行動である」と回答したものは0.9%であったという。しかしながら、長期的には自殺の危険因子と主張しており、「傷の手当て」を求めて、保健室を訪れる可能性が高いと考え、養護教諭は学校における自殺予防対策のゲートキーパーであると

述べている。

摂食障害に関する研究は、石川・酒井・関谷・秋山・林・岡田(2016)の調査では学校現場では養護教諭と担任が、医療機関にかかわる段階から相談を受ける例が少なくなかったという。作田(2015)の調査において、相談者が誰かという回答において、祖父母は20%、かかりつけ医は18%、養護教諭と担任は17%であり、医療機関受診を勧めた人はかかりつけ医が50%、養護教諭が25%、祖父母と担任と親の友人が8%であり、学校内における養護教諭の役割の重要性を述べている。

さらに神経性食欲不振症に関して、岡本・三宅(2015)が小・中・高等学校の養護教諭に質問紙調査を行っている。そこで身体測定を含めた健康診断が年1回以上行われていることから、早期発見対策が行いやすい環境にある養護教諭は重要な役割を果たしているのではないかと述べている。

また児童虐待について事例検討された研究がYamauchi, Kato, & Mukai(2010)によって報告されている。そこで養護教諭は子どもが頻回に保健室に訪れたり、異常な行動をとったりする場合、虐待の可能性を考慮すべきであると主張している。また、養護教諭は虐待発生の認識が難しいため、他の学校教員や外部との連携が効果的であったとも述べている。

不登校に関する研究は、文献検討のものが2件、事例研究が1件抽出された。有賀(2012)は高校生の不登校に関するレビューを行っており、その中で、養護教諭は不登校潜在軍の早期発見や適切な支援を行う上で重要な役割を担っていると考察している。また若本・山下・下舞(2009)は1990年から2007年の不登校に関する雑誌論文・記事の文献検討を行い、養護教諭はキーパーソンとなり、養護教諭の独自性を活かした支援の構築や取り組みの検討が必要であるとしている。岡島(2014)は登校しづりをしめす小1男児に行動療法的介入を行った事例について校内支援体制内での連携について検討をしている。ここでは養護教諭の介入により保健室登校が維持されたとある。

田口・橋本（2015）は発達障害や精神疾患およびその傾向がある生徒について、高等学校の養護教諭に質問紙調査を行っている。生徒に医療機関を紹介したり、保護者に受診を勧めたりしたケースを経験したことがある養護教諭は半数以上であり、橋渡しの役割を担っていることが示されている。古川・山元・松嶋（2010）は発達障害のある生徒に関わる私立高校の教員が求めるサポート内容から養護教諭の役割について検討している。そこでは、発達障害の理解および生徒や保護者への対応、専門機関との連携、校内における体制作りには重要な役割があるとし、教員側からは養護教諭の専門性を活かした関わり方を習得してほしいという内容があったとしている。

抜毛癖に関する研究では片桐（2014）が東京都全ての小・中・高等学校から無作為に500校を抽出し、そこに勤務する養護教諭に調査を行っている。結果として140校から回答が得られ、現在および過去において抜毛癖の子どもへの関与経験がある養護教諭は45.7%であったと報告している。

また、薬物問題に関して鈴木・武田・村上・杠・比江島・吉森・藤林（2002）が学校における薬物問題への早期対策として、従来からの生徒指導とは違う、メンタルヘルス相談としての新しいアプローチを見つけるため、神奈川県と佐賀県の公立学校の養護教諭を対象に検討を行っている。そこでは小学校からすでに相談を受けている実態があった。中学校の20%、高校の40%の養護教諭は違法性薬物について相談を受けたことがあり、養護教諭が生徒の薬物関連問題に近いところにいる専門家であると考察している。重複になるが、過敏性腸症候群に関しては前述した岡村・小林・森田・野中・蜂巢・張・増尾・工藤・森（2010）が検討している。

モラル・ハラスメント、精神的暴力に関する研究も抽出された（梶原・尾崎・奥田・宮崎・永井，2013）。その調査において、モラル・ハラスメントに関する認知度は2割程度と低かった。しかしながら、養護教諭の中には相談体験をしている者がおり、モラル・ハラスメントに

ついても養護教諭は健康課題として捉え、認識を高め、対応する際の二次被害防止に努める必要があるとしている。

また、震災時の心のケアについて、Kanaizumi, Aoyagi, Akuzawa, Kuroiwa, Shimoyama, Maruyama, Tamura, & Sakou（2017）は東日本大震災で被災した特別支援学校の養護教諭が行なった児童生徒に対する健康支援活動の事例について検討をしている。そこでは、被災した子どもたちに対して、メンタルヘルスケアを含む長期的な健康支援が必要であり、常に子どものそばに寄り添い不安を受け止め、安心感を与えることや医療や心理学の専門家と連携し、子どもの心のケアの早期介入をすることが重要であると報告している。また一方で子どもたちの感情をもっと引き出す方法を養護教諭が知っていればまた違ったサポートができたのではないかと述べている。このように震災時における養護教諭の対応や役割についても焦点が当てられていた。

以上、摂食障害や発達障害、自傷行為といった特定のメンタルヘルスの問題に焦点を当てて、専門的知識が必要とされる子どものメンタルヘルスの問題への養護教諭の対応、養護教諭へのニーズについても検討されたり、主張されたりしている現状がうかがえる。

まとめ

今回は子どものメンタルヘルスにおける養護教諭の役割・専門性に関する研究について概観してきた。

そこでは連携役（コーディネーター）をはじめとして、窓口の役割、直接的な授業実施者、子どもとの直接的な関わり、子どものサインを受けとる、子どものニーズを捉える、情報収集などの様々な役割や専門性が指摘されていた。特にこの養護教諭の連携役（コーディネーター）としての役割は、今回検索しただけでも多くの研究で指摘されていたことから、養護教諭の役割であり、期待されていることといえよう。

また、「連携」と共に「橋渡し」という言葉が

いくつかの論文で見受けられた。看護領域には、精神看護領域の専門的技術を持ち、かつそれを他科の看護領域に統合することにより、身体疾患をもつ患者や家族に対して質の高いケアを提供すること、さらに、ケアする看護師およびチーム医療のメンバーを支援する目的（西川，2012）をもった「リエゾン」ナースという専門の看護師が存在する。この「リエゾン」的役割は一つの専門性として、養護教諭でも同様に着目されていくものではないだろうか。

さらに「評価をしない存在」であることも指摘されていた。これは養護教諭の立場上の特性であり、このことは養護教諭の役割について言及していく際に必要な視点であろう。また、コラージュ療法の実践研究（Takata, 2002）において、時間制限のないことが主張されていたが、メンタルヘルスへのアプローチというのは時間を要するものであることは明らかである。すなわち、メンタルヘルスは長期的視点が必要であることを踏まえれば時間をかけられる環境が必要であるということは頷ける。学校においてそのような環境を確保できる可能性として養護教諭や保健室が考えられ、このような点からも子どものメンタルヘルスへの養護教諭の役割や専門性を考えていくことができるのではないかな。

さらに、モラル・ハラスメントや薬物などのメンタルヘルスに関する養護教諭の役割についても研究がされていた。薬物問題に関しては一見メンタルヘルスの範囲ではなさそうに思われるが、鈴木他（2002）が主張しているように、十分に子どものメンタルヘルスの問題として検討する必要がある。各研究からも示唆されているように、養護教諭が特定の子どものメンタルヘルスの問題に関する知識や学びを得るような機会が必要であると考えられる。

先述したようなこと以外に、子どものメンタルヘルスにおける養護教諭の専門性について、「身体と合わせてみていくこと」や保健の知識をもった「教育者」であることも忘れてはならない。また、今回学校種については言及していないが、養護教諭は、免許上、小・中・高のどの学校種にも異動する可能性があり、様々な発

達段階の子どもたちのメンタルヘルスに関する役割や専門性を期待される機会があることが考えられる。よって各発達段階を捉えながら適切にアセスメントできる技術が必要である。またどの発達段階にも関わる機会があるからこそ、発達段階を踏まえて小学校であれば高校までを、高校であれば小学校のことを踏まえていくように、学校種ごとのアセスメントではなく、流れとしてのアセスメントができる可能性もあり、小・中・高の一連の段階を通じてどのように対応していけば良いかのビジョンが見えやすいことは一つの専門性ではないかと考えられる。

課題としては、甘佐他（2011）が指摘していたように、学校内における他の教員との連携の問題が挙げられる。外部機関との連携も行われているものの学校内での連携も難しい現状がある。他の教員の理解を進めていくことなど、各々の立場による役割が存在する中でネガティブに作用するような養護教諭と他の教員との隔たりを埋めていくことが必要になる。このことは、子どものメンタルヘルスにおける養護教諭の役割や専門性に関する取り組み、実践や研究が今後より一層行われることも他の教員の理解を進める要因になるのではないだろうか。また、その際、学校における在職期間や立場、経験の違い、学問的背景や取得免許の違いなど養護教諭自身に関する要因も踏まえた検討が必要であると考えられる。

養護教諭の役割として多くの役割や専門性が指摘されてきているが、闇雲に全てを網羅していくことは単純に養護教諭の質的にも量的にも負担となっていくだけで、現実的ではない。また、学校や地域によってもニーズが異なるため、各々の養護教諭にとって本当に必要なものが選別され、効率的な研修を行うことが求められるだろう。その中で、例えば、この養護教諭は摂食障害、この養護教諭は発達障害に関して専門的な経験や知識をもち、理解しているといった各子どものメンタルヘルスへの養護教諭内での専門家を確立していけば、養護教諭間での助言や情報を求めることが可能となるだろう。外部機関との連携を視野に入れていく中で、そのよ

うな養護教諭間のネットワークを構築していくことも良いのではないだろうか。以上のように養護教諭への支援体制について検討する必要性も考えられる。

最後に、子どものメンタルヘルスに関する養護教諭の役割や専門性について焦点をあてた研究は未だ決して多くはなく、始まったばかりであるといえよう。そもそも子どもに限らず、我が国のメンタルヘルスへの取り組みや理解は身体的健康と比較しても日が浅く、まだまだ発展の余地がある。このことから、子どものメンタルヘルスに関する養護教諭の役割や専門性に関する研究は今後も検討されていく必要性があると考えられる。

引用・参考文献

- 秋山志津子 (2007). 養護教諭の立場で取り組んだスクールカウンセラー制度活用の試み 東海学校保健研究, 31 (1), 21-30.
- 甘佐京子・長江美代子・土田幸子・山下真裕子 (2011). 中学校養護教諭の語りからみえてきた問題行動を示す生徒への対応の現状と課題 精神疾患への早期介入に向けて 人間看護学研究, 9, 99-105.
- 有賀美恵子 (2012). 高等学校における不登校潜在群への支援に向けた研究課題の検討 高校生の不登校に関する文献レビューから 日本精神保健看護学会誌, 21(2), 1-10.
- 遠藤伸子・三木とみ子・平川俊功・鈴木裕子・大沼久美子・久保田美穂・力丸真智子 (2007). 健康相談活動に活かす養護診断開発システムに関する研究 メンタルヘルス岡本記念財団研究助成報告集, 18, 11-15.
- 古川(笠井)恵美・山本八千代・松嶋紀子 (2010). 発達障害のある生徒にかかわる私立高等学校教員が求めるサポート内容からみた養護教諭の役割 小児保健研究, 69 (6), 814-822.
- 堀籠ちづ子・多田淳子・吉田講子・遠藤巴子 (2004). 中学生の精神保健推進のための養護教諭の対応と役割 岩手公衆衛生学会誌, 16 (1), 72-81.
- 保坂隆 (2011a). 知っておきたい、これからのメンタルヘルス 精神障害の普及啓発に関する評価研究 (その 1) 保健師ジャーナル, 67 (10), 894-900.
- 保坂隆 (2011b). 知っておきたい、これからのメンタルヘルス 精神障害の普及啓発に関する評価研究 (その 2) 保健師ジャーナル, 67 (11), 1020-1024.
- 異儀田はづき・小山達也・嵐弘美・犬塚あつ子・田中美恵子・犬飼かおり…松壽英士 (2015). 中学校に勤務する養護教諭が捉える生徒の心の健康問題のサインとそれに関わる養護教諭の技術 東京女子医科大学看護学会誌, 10 (1), 1-10.
- 石川真紀・酒井裕美・関谷希望・秋山実砂・林偉明・岡田眞一 (2016). 思春期事例研修会アンケートによる摂食障害対応の現状 精神保健シリーズ, 46, 85-93.
- 石崎トモイ・中村恵子・伊豆麻子・栗林祐子・大森悦子・佐藤美幸・西山悦子 (2010). 心の健康問題を持つ子どものサインと養護診断及び対応プロセスに関する研究 新潟青陵学会誌, 3 (1), 63-72.
- 梶原京子・永田真弓・田中義人・宮里邦子 (2005). 夜間定時制高校保健活用生徒への養護教諭の対応と役割 思春期学, 23 (2), 260-267.
- 梶原京子・尾崎八代・奥田紀久子・宮崎久美子・永井純子 (2013). 養護教諭の「モラル・ハラスメント」の相談に関する研究 認知度・解釈・捉え方・相談体験の実態調査から 看護・保健科学研究誌, 13(1), 28-39.
- Kanaizumi, S., Aoyagi, C., Akuzawa, C., Kuroiwa, H., Shimoyama, K., Maruyama, Y, ...Sakou, K. (2017). Healthcare support by a Yogo teacher at a school for special needs education who experienced the Great East Japan Earthquake. *Health Emergency and Disaster Nursing*, 4 (1), 66-73.

- 片桐由紀子 (2014). 抜毛癖の子どもの臨床像と情緒行動特性の関連 CBCL 教師版 (TRF) を用いた検討 児童青年精神医学とその近接領域, *55* (1), 45-54.
- 北川裕子・佐々木司 (2016). タブレット端末を活用した思春期児童生徒の精神保健アセスメントの試み 保健室での模擬実施で得られた評価の報告 精神科, *29* (1), 63-72.
- 今野浩之・佐藤大輔・高谷新・田名部由香・青木実枝 (2018). 精神的問題を抱える生徒への関わりの実際 中学校・高等学校養護教諭へのインタビュー調査 山形保健医療研究, *21*, 43-50.
- 熊谷恵子・山中克夫・藤生英行・仲田洋子・杉原一昭 (2000). 学校における子どものメンタルヘルスのためのサポートシステムの構築 教育相談施設と学校との連携リハビリテーション連携科学, *1* (1), 116-130.
- 栗林祐子・中村恵子・塚原加寿子・伊豆麻子・大森悦子・佐藤美幸…西山悦子 (2014). 心の健康問題をもつ子どもの養護診断・対応における養護教諭の所有免許による相違に関する研究 新潟青陵学会誌, *6* (3), 13-24.
- 日下純子・廣部すみえ (2007). 養護教諭の今日的課題 心の健康問題を持つ児童や生徒に対する養護教諭の実践の特徴 保健室登校児童生徒を中心に 保健の科学, *49* (1), 41-45.
- 真志田直希・佳村亜加里・岩田光宏・横治絵理奈・中島宗幸・尾形治世子…森川将行 (2014). 中学校における精神保健授業の試み 「相談する」をテーマとした教育と精神保健の協働 堺市心の健康センター研究紀要 *6*, 13-29.
- 増本由紀子・笠置恵子 (2017). 精神不調のある高校生に対する養護教諭の支援の現状と課題の検討 思春期学, *35*(3), 293-304.
- 松本俊彦・今村扶美・勝又陽太郎 (2009). 児童・生徒の自傷行為に対応する養護教諭が抱える困難について 養護教諭研修会におけるアンケート調査から 精神医学, *51* (8), 791-799.
- 文部科学省 (1990). 生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について (保健体育審議会 答申) Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_hoken_index/toushin/1314691.htm (2019年1月15日)
- 文部科学省 (2017). 現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～ Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/_icsFiles/afieldfile/2017/05/01/1384974_1.pdf (2019年1月15日)
- 毛利史枝・加藤久美子・松本禎明 (2016). 自傷行為の子どもに対する養護教諭の理解と支援に関する研究 九州女子大学紀要, *52* (2), 203-217.
- 中村恵子・塚原加寿子・伊豆麻子・栗林祐子・大森悦子・佐藤美幸…西山悦子 (2013). 心の健康問題を持つ子どもの養護診断・対応に関する研究 新潟青陵学会誌, *5* (3), 1-9.
- 日本学校保健会 (2013). 平成 23 年度調査結果 保健室利用状況に関する調査報告書 勝美印刷
- 西川律子 (2012). 精神看護専門看護師の活動 日本医科大学医学会雑誌, *8*(3), 228-229.
- 小塩靖崇・芦川恵美・道上恵美子・大沼久美子・種市摂子・布山タルト…佐々木司 (2016). 学校の教員向けメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの効果検証 精神科, *29* (4), 358-366.
- 岡島純子 (2014). 行動療法的介入が奏功した投稿しづりをしめす小1男児の1例 校内支援体制内での連携を通じて 子どもの心とからだ, *22* (4), 315-319.
- 岡本百合・三宅典恵 (2015). 学校における神経性食欲不振症 小・中・高校養護教諭アンケート調査 心身医学, *55* (11),

- 1251-1258.
- 岡村信一・小林良太・森田恭子・野中真知・蜂巣陽子・張亜晶・森晶朋 (2010). 児童生徒の過敏性腸症候群 養護教諭へのアプローチ 群馬医学, 93, 215-219.
- 岡崎由美子・安藤美華代 (2011). 児童の学校ストレスに対する心の健康教育 養護教諭による授業の試み 学校保健研究 53 (5), 437-445.
- 崎山忍・飯田順三・岩坂英巳・平尾文雄・畑和也・岸本年史 (2000). 教職員の児童思春期精神科医療に対する意識調査 小児の精神と神経, 40 (1), 35-42.
- 櫻井聖子・青木紀久代 (2005). 中学生のメンタルヘルスと心理的サポート源としての保健室 保健室頻回利用者とのサポート源を持たない生徒のメンタルヘルス検討の試み 学校保健研究, 47 (1), 50-61.
- 作田亮一 (2015). 摂食障害 子どものこころ診療センターでの取り組みと地域連携 児童青年精神医学とその近接領域, 56(4), 570-575.
- 佐々木かよ子・藤原忠雄 (2017). 東日本大震災被災地でのストレスマネジメント教育プログラムの効果の検証 養護教諭が関わる保健教育の実践的研究 ストレスマネジメント研究, 13 (2), 85-94.
- 佐藤美幸・中村恵子・塚原加寿子・伊豆麻子・栗林祐子・大森悦子・西山悦子 (2013). 子どもの心の健康問題における学校と外部機関との連携に関する研究 新潟青陵学会誌, 6 (1), 71-78.
- 鈴木健二・武田綾・村上優・杠岳文・比江島誠人・吉森智香子・藤林武史 (2002). 薬物乱用のハイリスクグループへの介入 厚生科学研究費補助金医薬安全総合研究事業研究報告書 薬物依存・中毒者の予防, 医療およびアフターケアのモデル化に関する研究 平成 13 年度, 127-132.
- 田口禎子・橋本創一 (2015). 発達障害・精神疾患およびその傾向がある高等学校生徒支援の実態調査 発達障害研究, 37 (2), 186-199.
- 篁宗一・稲光哲明・福田倫子・吉岡伸一 (2008). 中学生のストレスと心の悩みを相談する場所としての保健室の機能評価 教育保健研究, 15, 19-27.
- Takata, Y. (2002). Supporting by a nurse teacher in a school infirmary using collage therapy. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 56 (4), 371-379.
- 富樫和枝 (2017). 精神保健に関する早期発見対策における問題点 養護教諭の役割・専門性 東北文化学園大学看護学科紀要, 6 (1), 11-21.
- 我妻則明 (2004). 養護教諭の保健指導への森田理論の応用 その研修講座のモデル化メンタルヘルス岡本記念財団研究助成報告集, 15, 83-84.
- 若本純子・山下みどり・下舞久恵 (2009). 国内における不登校研究の概観 1990-2007年における雑誌論文・記事による研究動向の検討および不登校に対する重要な援助資源である教師・家族に焦点をあてた概観 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要, 4, 2-17.
- 山城厚生・久田志津代・金子宏明・杉本好行・荒田真理子 (1988). 思春期精神保健に関する地域の連携について 養護教諭・民生児童委員・開業医の意識に関する調査報告 静岡県精神衛生センター所報, 18, 22-45.
- Yamauchi, K., Kato, T., & Mukai, Y. (2010). An example of a neglected child who constructed a special safe place both at home and at school. *School Health*, 6, 1-5.
- 安林奈緒美 (2012). 保健と教育が交錯する場における養護教諭の役割 学校管理職へのインタビュー調査を手掛かりにして保健医療社会学論集, 23 (1), 74-84.
- 米田昌代・林謙治・吉村伸子・高石昌弘・久田志津代・宮里勝政 (1987). 地域思春期保健システムの可能性について 思春期学, 5 (2), 162-172.

A Review of Roles and Professional Specialty of School Nurses in Children's Mental Health: Focusing on School Health Field

Izumi ONUKI
Ichiko SHOJI

The purpose of this article was to review prior studies on roles and professional specialty of school nurses in children's mental health, and point out the prospects and the tasks in the study of them.

We extracted 46 studies from Ichushi-Web and CiNii, and reviewed them. These studies were mainly classified into following categories: "Study that targeted at school nurses", "Study of school nurses from a viewpoint of children and managerial positions", "Practical study by school nurses", "Practical study that focused on school nurses", and "Study of specific mental health problems of children and research on school nurses". Many studies suggested that school nurses have many roles and professional specialty in children's mental health, especially as coordinators. This article pointed out the prospects and the tasks in the study of roles and professional specialty of school nurses in children's mental health.